

【論 説】

ペンテコスタリズム ——その基本的性格と歴史的展開——

川 島 耕 司

目 次

はじめに

1 ペンテコスタリズムの起源と展開

2 聖霊の経験

3 神癒の役割

4 非ヨーロッパでの受容

おわりに

はじめに

近代化とともに宗教は衰退し、その重要性は失われていくという世俗化論に対しては大きな異議申し立てが行われている。よく知られているように、世俗化論は19世紀以降、合理主義や科学の進展とともに大きな影響力をもつようになった。マックス・ウェーバーやエミール・デュルケムといった著名な学者たちもそれぞれ異なる仕方で、世俗化論を説いた。現在においても西ヨーロッパや日本における宗教離れが指摘されることがある。しかし世界の多くの地域において宗教離れは起こらなかった。実際、今日でも世界人口の8割は神（あるいは神々）が存在すると信じており、また主要な宗教を信じる人々は、1900年には58パーセントであったが、2000年には70パーセントになった¹⁾。

その結果、20世紀後半ごろになると世俗化論を疑問視する動きが出てきた。ホセ・カサノヴァが宗教の「脱私事化」を指摘したこと、また、それま

ペンテコスタリズム（川島）

で世俗化論を主導してきたピーター・バーガーが1990年代に「敗北宣言」を発表し、「脱世俗化」を説いたことはその代表的動きである²⁾。こうして現代は「ポスト世俗化の時代」であり、21世紀は「神の世紀」であるともされる³⁾。こうした認識の変化は、宗教の復興と呼ばれる動き、特に、イスラーム主義の運動の拡大や過激派によるテロリズム、アメリカ合衆国における福音主義の台頭、あるいは南アジアなどにおける宗教的ナショナリズムの隆盛と宗教間暴力などによっても促進されているようにみえる。しかし比較的見落とされているのが、グローバルなキリスト教世界におけるきわめて大きな変化である。

キリスト教の形は現在非常に大きく変わりつつある。非西洋地域におけるキリスト教の影響はますます高まっている。1910年には全キリスト教徒の80パーセントはヨーロッパか北アメリカの人々であったが、今日では40パーセント以下になっている。そしてこのキリスト教の重心の移動とでも言う状況の形成に大きく貢献したものの一つは、明らかにペンテコスタリズムの急速な拡大である。ペンテコスタリズムとは聖霊の働きを重視し、初代教会にあった信仰の原初的形態を取り戻そうとするキリスト教内の一運動である。その起源に関しては後述するように諸説あるが、20世紀初頭に世界各地で同時発生的に生まれたとされることが多い。ペンテコスタリズムを信じる人々は2010年には全世界で約6億人であるとされ、誕生からわずか100年ほどで全キリスト教徒の4分の1を占めるに至った。彼らはさらに今後もキリスト教人口の増加率の2倍のペースで増えると予想され、2025年には全キリスト教徒の3割ほどになると考えられている⁴⁾。

ペンテコスタリズムの影響に関して比較的頻繁に言及されるのはサハラ以南のアフリカやラテンアメリカである。しかし、インドネシア、フィリピン、韓国においてもその影響は顕著であり、中国においてもハウス・チャーチ運動という形で信者が増加しつつある⁵⁾。実際、近年においてもっとも増加率が高いのはアジアであるといわれる。従来アジアでは仏教、ヒンドゥー教、イスラームなどの影響力、あるいは国家による統制が強く、キリスト教

は概して他地域ほどは拡大してこなかった。しかし、その状況も近年大きく変わりつつある。アジアのほとんどの地域でペンテコスタリズムの影響がみられるが、アフガニスタンとカンボジアにおける増加は特に顕著であると考えられる⁶⁾。シンガポールにおいても信者が増えており、メガ・チャーチと呼ばれる巨大教会も多くつくられている⁷⁾。南アジア、特にインドやスリランカにおいても信者数は大きく増えており、ヒンドゥー教徒や仏教徒の排他的なナショナリズムを刺激している⁸⁾。

ヨーロッパにおいてもカトリックや伝統的なプロテスタント教会の信者数は概して減少しているが、ペンテコステ／カルスマ派を中心とする教会は大幅に信者数を増やしていると考えられている⁹⁾。また、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の最近の報告によれば、「カトリック国」であるとみなされてきたスペインにおいても近年プロテスタント教会が急速に増加しており、2018年のみで197教会が新設された¹⁰⁾。実際、ペンテコスタリズムはスペインでもっとも急速に拡大している宗教運動であり、福音主義としてくられる運動のなかの半分以上を占めている¹¹⁾。

さらに、ヨーロッパに到着した移民たちの教会がヨーロッパ社会に与える影響も注目されている。移民たちの教会の多くが「ディアスポラの教会」として彼らの信仰や文化を保持する役割を果たすためにつくられている側面があることは確かである。しかしなかには受け入れ国の人々に伝道するための宣教の橋頭堡としてつくられているものもあると報告されている¹²⁾。宣教の流れが従来の西洋から非西洋へという一方向ではなく、きわめて多方向になっているという状況は確実に存在する。

ペンテコスタリズムはこのように20世紀を通じて急速に拡大してきたのであるが、この運動はそもそもどのようなものであり、またなぜこれほど短期間に多くの人々に受け入れられたのか。あるいは、どのような社会的、経済的、政治的影響を与えてきたのであろうか。真摯な学問的関心を向けるべき対象であることは明らかであろう。実際、欧米などにおいてはますます多くの重要な学際的研究が発表されるようになってきた。そのなかでたとえば

ペンテコスタリズム（川島）

開発途上国の貧困層や女性のエンパワーメントの問題、あるいは民主化過程における市民社会形成への貢献などに関する検討が行われている¹³⁾。

しかしながら、この運動に対する認知度は社会一般のみでなく、アカデミズムにおいても必ずしも高いとは言えない。特に日本においては明らかに十分には認知されていないように思われる。本稿は、今日の世界の政治的、経済的なあり方とも明らかに深く結びついているペンテコスタリズムに関して、必要に応じて私自身のスリランカにおける調査を参照しつつ、その基本的性格や歴史的展開のあり方を明らかにすることを目的としている。

1 ペンテコスタリズムの起源と展開

ペンテコスタリズムとは、聖霊を受けること、特に聖霊によってもたらされる預言、神癒、異言といった霊的な賜物（spiritual gift）を重視するキリスト教内における多面的な運動である¹⁴⁾。前述したように、この運動は20世紀に急速に拡大したのであるが、そのおそらく最大の起源はロサンゼルスのアズサ通りにある。この地でアフリカ系アメリカ人牧師を中心に発生したリバイバル運動は多くの人々を集めた（リバイバルとはペンテコスタリズムの文脈においては、聖霊の影響下で爆発的に信者が増える現象を指すことが多い）。彼らはその地で「聖霊のバプティスマ」を経験し、世界各地へと伝道に向かった。しかし、今日のペンテコスタリズムの起源のすべてが北アメリカにあるわけではない。きわめて興味深いことであるが、アズサ通りでのリバイバルの前後に同様の出来事が世界各地で自然発生的に生まれていた。そしてそれらのなかからも伝道者が生まれ、明らかにこの運動の拡大に寄与した¹⁵⁾。

インドにおいてもアズサ通りの運動とほぼ同時期にリバイバルが発生した。インドではすでに19世紀後半に各地のキリスト教会において散発的に小規模なリバイバルが起きていた。しかしより広範囲に影響を与えることになったのは、インド西部の都市プネーのムクティ・ミッションにおいて

1905 年から 1 年半の間続いたリバイバルであった（ムクティとは「救済」を意味する）。これは、バラモン出自のパンディタ・ラマバイという女性がつくった伝道慈善団体の女子寮において、1905 年 6 月 29 日に少女たちが聖霊のバプティスマを受けたことから始まった。彼女たちは、アズサ通りや他地域での出来事を知る前に異言を発したとされている。

ラマバイとともにリバイバルを経験した後、女性たちはインド各地にその経験を伝えた。さらにムクティ・ミッションでの出来事はチリのバルパライソとサンティエゴにあったメソディスト教会にも伝わり、1909 年のチリでのリバイバルにつながった。それゆえ、チリのペンテコスタリズムはその直接のルーツをインドのムクティ・リバイバルにもっていると考えられている。このようにインド内外において影響を与えたという点でも、ムクティ・ミッションはペンテコスタリズムの初期の中心の一つであるとみられるべきであると考えられている¹⁶⁾。

ムクティ・ミッションは女性に導かれた女性たちの運動であり、抑圧され、周縁化された女性たちを動機づけ、エンパワーしたという点でも注目されるべきであると議論される。ペンテコステ運動はかなりの程度において女性やマイノリティなどの抑圧された人々による運動であるという特質をもつものであるが、女性たちが中心になったという点において、ムクティ・ミッションはアズサ通りの運動よりもさらに特徴的であった。インド各地にペンテコスタリズムを伝えたのも女性たちであった¹⁷⁾。

また 20 世紀初頭の朝鮮半島においても聖霊のバプティスマ、神癒、奇跡を含むリバイバルが発生していた。最初のリバイバルは、1903 年 8 月にウォンサン（現在の北朝鮮の東海岸に位置する港町）で始まった。その後 1905 年から 1907 年にかけてピョンヤンやソウルなどでもリバイバルが発生した。これらの運動に関する記録には異言は記されていないが、多くの奇跡、神癒、悪霊追い出し、その他の超自然的な出来事の発生は、ペンテコステ派のリバイバルにきわめて近いものであった¹⁸⁾。また、1904 年から 1905 年にかけてウェールズで起こったリバイバルはイギリスのペンテコスタリズ

ペンテコスタリズム（川島）

ムの歴史の中での重要な出来事であるとされている¹⁹⁾。さらに後述するように、テキサスのチャールズ・F・パーハムの教会で異言がみられたことがペンテコスタリズムの起源であるとする見方もある。このように20世紀初頭ごろに世界各地でリバイバルが起こったのであり、いずれか一つを唯一の起源とすることは難しい。しかしながら、ロサンゼルスのアズサ通りでのリバイバルが非常に多くの宣教師たちの活動の拠点となり、ペンテコスタリズムの世界的展開にきわめて重要な影響を与えたことは事実である。

アズサ通りでのリバイバルは1906年から1909年まで続いた。その中心になったのは、ウィリアム・ジョセフ・シーモア（William Joseph Seymour, 1870-1922年）というアフリカ系アメリカ人である。彼はメソヂスト派の中で発生したホーリネス運動の説教者であり、解放奴隷の息子であった。1906年4月9日にシーモアが滞在していた家で、その家の主人がシーモアとルーシー・ファローというテキサスから来た伝道者に按手を求めたことからこの地でのリバイバルは始まった。

彼らが按手すると家の主人は床に倒れ、異言を語りはじめたと伝えられている。そしてその日の夕方から3日間以上にわたって、シーモアを含む7人が同じような経験をすることになった。3日の間、夜昼なく人々が続々と集まり、祈り祝福した。そのためその家はすぐに手狭になり、一週間以内にももとは倉庫であったアズサ通りの建物を借りて、「使徒の信仰教会（Apostolic Faith Mission）」という教会を設立した。この教会での会合は毎日朝10時に始まり、深夜遅くまで続いた。異言で歌ったり、人々が床に倒れ込んだりすることは一般的な現象であった²⁰⁾。

アズサ通りでのリバイバルはこのような身体的表現を伴うものであった。このリバイバルを目撃した人物のなかに前述のチャールズ・F・パーハムがいた。人々は「呪文をかけられ、痙攣し、トランス状態になって倒れた」と彼はその時のことについて記した。もっともパーハムはこうした礼拝のあり方には批判的であった。彼は聖霊のバプティスマと異言は認めていた。実際、テキサスにあったパーハムの教会は異言が発せられることでよく知られ

ていた。シーモアもそのことを聞きつけ、実際にパーハムの教会を訪れ、聖霊の働きに関する認識を深めたと言われる。それはアズサ通りでのリバイバル以前のことであったので、前述したように、ペンテコスタリズムの起源をパーハムの教会での出来事であるとする見方もある。しかしパーハムは、異言に関しては正当なキリスト教的経験として認めたものの、「トランス状態になって倒れる」という経験は特殊な出来事として無視したのである。それに対してシーモアらは、異言のみでなくこうした身体的経験をも真性なものを見なした。彼らはそれを聖書の記述によって擁護した²¹⁾。後述するように、これは「霊によって倒される (Slain in the Spirit)」などとして言及される現象であり、現在でも多くのペンテコステ派教会でみられるものである。

もともとホーリネス運動の教会として「キリストにおける神の教会 (The Church of God in Christ)」を設立したチャールズ・H・メイソン (1866-1961) は、アズサ通りのリバイバルにおいて聖霊のバプティスマを経験した一人であった。彼の教会は、他の多くの教会と同様に、その後ペンテコステ化し、アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教会などと並んでペンテコステ派内における大きな宗派の一つとなった。メイソンはアズサ通りでのその時の聖霊体験をシーモアたちの新聞に次のように記している。

私は神に完全に身を任せ、神に同意した。その後、私は知らない言葉で歌を歌い始めた。神が私を通じてその歌を歌うに任せることはこの上もなく心地よいことであった。神は完全に私を満たしていた。私は神に私の口とすべてを捧げた。その後、私は十字架のそばに立っていて、イエスが亡くなる時に発したうめき声を神が発し、そして私もうめいたようにみえた。私が私のなかで聞いたものは私の声ではなく、私の最愛の方の声であった。……私は神の両手の中で言いなりになっていた。私は何かをしようとはしなかった。私は人々の話を聞くことができたが、何も気にならなかった²²⁾。

多くの人々がこのような聖霊に満たされる経験を持ち、それを熱意をもってより多くの人々に伝えようとしたのである。

アズサ通りでのリバイバルは世界中に知れ渡ることになったのであるが、

その際大きな役割を果たしたものの一つが世俗のメディアによる報道であった。この特異な宗教的出来事は多くの場合嘲笑的に伝えられた。メディアはロサンゼルスと比較的貧しい労働者階級の地域にある人種や文化が混合した教会におけるこうした出来事を面白おかしく報道した²³⁾。多くの人が礼拝に訪れ、叫び、飛びはね、踊り出し、床の上に倒れ、転がり、トランスのような状態を経験する様子は、「聖なる回転者（The Holy Roller）」などとして揶揄された。そうした報道がこの運動をおとしめたという側面は明らかにあった。しかし逆にこれによってこのリバイバルはさらに知れわたることになった²⁴⁾。

こうしたなかでホーリネス運動ですでに新聞の編集経験を積んでいたクララ・ラムという人物とウィリアム・シーモアとが、『使徒の信条（The Apostolic Faith）』という彼ら自身の新聞を発行し始めた。1906年9月に発行された創刊号の発行部数は5000部であったが、1908年半ばには5万部が刷られ、世界各地へと送られた²⁵⁾。2年足らずで発行部数は10倍に増えたわけである。

世界中で関心が高まるなかで、ますます多くの人々がシーモアたちの教会を訪れた。リバイバルを体験した人々はその後世界中に散らばり、さらに信者を増やすことになった。人々はホーリネス運動やCMA（Christian and Missionary Alliance）のような急進的な福音主義組織に加入し、それらをペンテコステ化していった。宣教師の数も急速に拡大し、たとえば中国国内だけでも1915年までに150人のペンテコステ派の外国人宣教師が活動していた。ペンテコスタリズムは、「前例がないほどの活気のある宣教師の移住運動」をもたらした²⁶⁾。

世界中に広がったペンテコステ派の宣教師たち、あるいは各地の信者たちの間にはネットワークがつくられていった。多くの定期刊行物が無料で配布され、ネットワークを形成し、維持する役割を担った。こうしたなかでグローバルなコミュニティの一部であるという感覚、あるいはメタ・カルチャーとも呼ばれうるものがつくられていったと考えられている。ペンテコステ

運動に共通する大まかな輪郭が徐々に形成され、標準化されて来たことも事実である。それはアンドレ・ドゥローガースによれば以下の3点であった。まず、(1) 聖霊の経験に中心的重要性を置くことであり、その経験には異言のような「忘我的顕示 (ecstatic manifestation)」が付随することである。次に、(2) ペンテコステ派のコミュニティに受容されることにともなう「再生 (born again)」、あるいは回心 (conversion) の経験があることである。そして最後に、(3) 二分法的な世界観であり、それは「現世 (world)」と「教会」、「悪霊」と「聖なるもの」、「病気」と「健康」が対立するものとして認識されることである²⁷⁾。

2 聖霊の経験

すでに触れたように、ペンテコスタリズムを他のキリスト教宗派と区別するおそらく最大の特徴は、異言、預言、神癒、奇跡、悪霊追い出しといった聖霊によって贈られるとされる賜物 (gift) をきわめて重視する点である。ピュー研究センター (Pew Research Center) の2006年の報告によれば、この派の圧倒的多数の人々は、彼らの礼拝において異言が発せられたり神癒のための祈りが行われたりすることが少なくとも時折あると答えている。大多数の人々は自らが病気や怪我から回復したか、その経緯を目撃したとしている。異言に関しては、異言を話したり、異言で祈ったりすることのない人も多く、4割以上がその経験がないとされるものの、礼拝において異言があることは一般的であるとされている。また、この調査によれば、8割以上のペンテコステ派の人々は、奇跡は古代に起きたように、現代においても起こると信じている²⁸⁾。

ペンテコスタリズムにおいては聖霊に満たされることに大きな価値を置くのであるが、初めて聖霊に満たされる経験を「聖霊のバプティスマ (Baptism in the Holy Spirit)」と呼び、その最初の証明が異言であると考えられている。他の宗派のように水による洗礼も行われるのであるが、聖霊のバプティ

ペンテコスタリズム（川島）

スマは決定的な重要性をもつものと言われる。ペンテコステ派の人々にとってのもっとも代表的な聖霊のバプティスマは『新約聖書』の「使徒言行録」（2：1-4）に記録されたペンテコステの日、つまりイエスの復活日より50日目の聖霊降臨のなかで起こったものである。そして彼らは現代においても同様の出来事を体験しようと考えている。聖霊のバプティスマは「聖霊のリアリティのなかに完全に沈むことであり」、そしてそのように洗礼を受けたものは誰もが「聖霊の現存と力についての生き生きとした意識をもつ」と説明される²⁹⁾。

聖霊のバプティスマはたとえば次のような形で表れる。インド・トラヴァンコール（現在のケーララ州南部）の A. M. O. マンメン（Mammen）という男性はペンテコステ派機関紙に彼の妻の体験を目撃した時のことを次のように書いた。「1912年6月3日、私の妻は礼拝中に聖霊のバプティスマを受けた。彼女は1時間以上の間、踊り、飛びはね、手拍子を打ち、そして異言で歌を歌っていた」。その約10日後に彼ら夫婦は水の洗礼を受け、同じ年の10月31日にマンメン自身も聖霊のバプティスマを受けることになった³⁰⁾。

聖霊のバプティスマが重要であるのは、それが力を与える出来事であるとされるからでもある。復活したイエス自身が、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」（「使徒言行録」1：8）と述べたことが実際に起こるのだと信じられているのである³¹⁾。またこの力は伝道のための力であるとも考えられているが、それは「地の果てに至るまで、わたしの証人となる」とイエスが述べたためである。こうしてペンテコステの日には聖霊のバプティスマを受けたイエスの弟子たちはこの力を得て、迫害に耐え、伝道を行ったのである。ペンテコステ派の人々は同様のことが現在においても起こりうると信じている。それゆえ、聖霊のバプティスマを受けた人々はイエスの使徒らと同様の熱意と力をもって伝道することになる。ペンテコスタリズムの驚異的な拡大の原因の一つがここにあることは間違いない。

また、聖霊のバプティスマは「力あるわざ（mighty works）」を行うための力を与えるものだともされている。これは病人を癒し、また悪霊を追い出

す力である (たとえば「マタイによる福音書」4:23; 12:28)。ペンテコステの出来事の後、イエスの使徒たちは「多くの不思議な業としるし (signs and wonders)」を行うことになった (「使徒言行録」2:43)。こうして、彼らが行った奇跡に関して、たとえば、「エルサレム付近の町からも、群衆が病人や汚れた霊に悩まされている人々を連れて集まってきたが、一人残らずいやしてもらった」とある (「使徒言行録」5:16)。ペンテコスタリズムにおいてはこのように聖霊に導かれ奇跡を起こすことは今日でも可能であると考えられているのである³²⁾。そしてそれが、後述するように、多くの人々がこの信仰を受け入れる大きな要因の一つとなっている。

異言 (glossolalia: speaking in tongues) は初期のペンテコステ派内においては聖霊に満たされるなかで未知の言語を話すことであるとされたが、現代においては特定の意味を有さない言葉を発することを指すことが多いとされる³³⁾。異言は聖書のなかで何度も言及される行為である。しかし、カトリック教会や多くのプロテスタント教会では基本的に異言を含むカリスマ (賜物) は使徒の時代に終わったと考えられている。この見方を確立したのは聖アウグスティヌス (354-430) であった。マルティン・ルター (1483-1546) やジャン・カルヴァン (1509-1564) も異言には否定的であった。ルターは、異言はユダヤ人に与えられたしるしであり、終わったものであり、キリスト教徒には奇跡はもはや必要ないとみなした。カルヴァンは、神は異言を教会から取り除いたし、奇跡はずっと以前に終わっているのだと述べた³⁴⁾。

しかしそうした状況にもかなりの変化が生じ始めた。18世紀初期にはメソヂストの集会において預言や神癒とともに異言を含む忘我的顯示がなされた。1820年代と30年代においてはシェーカー教徒の間に、あるいはロンドンの長老教会の人気牧師であったエドワード・アーヴィング (1792-1834) の追随者の間にも異言が起こり始めた。1840年代にはモルモン教の指導者たちが異言を話した。他方、19世紀を通じて拡大し続けたホーリネス運動においては、聖霊のバプティスマを求める動きが高まってきた。こうした展開のなかで、異言と聖霊のバプティスマを結びつけるペンテコスタリズムが

ペンテコスタリズム（川島）

生まれたのである³⁵⁾。

こうした誕生の経緯もあって初期のペンテコステ派教会においては、異言にはかなりの比重が置かれた。前述したように、聖霊のバプティスマの最初の証明が異言であるとされたのである。実際、先にも触れたように、今日のペンテコステ派の教会においても異言が聞かれることは多い。私自身も、訪問したいいくつかのスリランカのペンテコステ派キリスト教会の礼拝の場で異言を聞いた。

ただ、異言の重要性に関する見方は、この100年ほどのペンテコスタリズムの歴史のなかでかなり変化したと考えられている。特に、1960年代以降に生まれたカリスマ運動においてその傾向が強かった。異言は信仰の表れであるとはみられ続けてはきたが、しっかりと回心を達成したことの証拠であるとは必ずしもみられなくなったのである。同様のことはペンテコステ派の多くの教会でも起こり、20世紀半ば以降、異言のもつ重要性は低下している³⁶⁾。異言は一般に公的な場よりも私的な礼拝において近年ますます用いられるようになってきている。これは世界的な動きであり、ポーランドによればインドにおいても同様の傾向にある³⁷⁾。

ところで、異言という語句は前述したように新約聖書に登場するものであり、ある程度聖書の知識がある人々にとってはその言葉自体は特異なものではないであろう。しかし、ある種の超自然的な現象であるとみられうることは間違いない。そのためこれを精神異常と関連づける見解もあった。人類学者であり、また言語学者でもあったグッドマンは異言を科学的に解釈しようと試み、これは通常のリアリティから引き離された変性意識状態（altered state of consciousness）において生まれるものだとして主張した³⁸⁾。しかし他のいくつかの研究は、トランス状態や他の大きな心理的变化がなくても異言が発せられることがあることを明らかにしてきた。この問題に関して、ニュージーランドの宗教運動を調査したヘザー・ケイヴァンは、自然発生的異言（spontaneous glossolalia）と状況依存型異言（context-dependent glossolalia）があると述べている。彼女によれば、自然発生的異言は宗教的

な変性意識状態の産物であり、発話者の心の中から出てくるものである。それに対して、状況依存型異言が変性意識状態をとまなうことはまれであり、それ自体には大きな喜びはないのであるが、それによって過去の聖霊のバプティスマの記憶が明確になり、その再現を望む気持ちを生むのだと指摘している³⁹⁾。

異言と同様にペンテコステ派教会でしばしばみられる現象に「霊によって倒される (Slain in the Spirit)」というものがある。これも部外者からすれば明らかに特異なものであるが、かなり頻繁に起こるようである。私もスリランカのペンテコステ派教会でたびたび目撃した。宗教学者のドナルド・ミラーが以下のように記述している状況は、私が見たものと非常に近い。ミラーによれば、彼の南カリフォルニアのヴィンヤード・フェローシップという教会での最初の経験は次のようなものであった。「礼拝の終わりに、何十人という人々が祈りのために前に出てきた。平信徒の教役者たち (lay ministers) がその人々に手を当てると彼らの多くは震えだし、トランス状態になって倒れた」⁴⁰⁾。

このミラーの記述にある「手を当てること」はキリスト教の用法で按手と呼ばれ、また礼拝の終わりに前に出ることはオルター・コール (altar call) とも呼ばれる。多くのペンテコステ／カリスマ派の教会では、このように倒れることを予期して、あらかじめ受け止める人が配置されている。彼らはキャッチャーとも呼ばれ、按手される人の後ろに立ち、両手を軽く横に広げて、いつでも受け止められるようにしている。私のスリランカでの経験では、人々はキャッチャーに受け止められつつ静かに倒れ、その場にしばらく横になった後に自分で起き上がる形が多かった。しかし、なかには床の上で手足をばたつかせる人々もあった。他の地域においてもその形態はさまざまであるといわれる。この経験は通常 2,3 秒から数分続くが、なかには何時間も続くものもある。また倒れた人々はこのときのことを深く精神的なものとして経験し、直後には漠然とした多幸福感を得ると指摘されている。

この霊によって倒されるという現象はキリスト教会の歴史のなかでは比較

ペンテコスタリズム（川島）

的新しいものであると言われるが、ペンテコスタリズムの登場以前にも確かにみられたものである。14世紀のドミニコ派の修道士にもみられたし、メソヂスト運動の指導者ジョン・ウェスレー（1703-1791）やアメリカを代表する神学者であるジョナサン・エドワーズ（1703-1758）の記録にも存在する⁴¹⁾。19世紀以降のホーリネス運動のなかで活動したマリア・ウッドワースという人物は「トランス伝道者（trance evangelist）」として知られていたのであるが、彼女の活動記録にもまた人々が倒れる様子が記されている。それは1882年にオハイオ州のあるメソヂスト教会においてのことで、彼女が聖霊のバプティスマを求める礼拝を行ったところ、15人の男女が祭壇に向かい、恩恵を求め、倒れ、「死んだように横たわった」⁴²⁾。

しかし聖書の記述によって「霊によって倒される」という現象を根拠づけることは必ずしも容易ではないとされている。聖書のなかに類似する箇所があることは事実である。たとえば、弟子たちがイエスを前にして「地に倒れた」（「ヨハネによる福音書」18：1-6）などの記述がそれに近いとされてきた。パウロがその回心の時に地に倒れたこと（「使徒言行録」9：4）、「ヨハネの黙示録」の「わたしは、その方を見ると、その足もとに倒れて、死んだようになった」（1：17）という箇所を示し、教会内でも同じことが起こっているのだと解釈された。ただしこれらはある意味特殊な事例であり、霊によって倒されることをキリスト教徒の生活の標準的な経験であるとする根拠が聖書のなかにないことも事実である⁴³⁾。それでも、この現象はペンテコステ／カリスマ派の教会における礼拝時においてかなり頻繁にみられるものであるし、ペンテコスタリズムにおける一つの重要な要素であるとみなされて来たことは確かである。

3 神癒の役割

ほとんどのペンテコステ／カリスマ派の人々にとっては、神は活発に人々の生活に介入するものである。神は神癒（divine healing）を含む人々の日常

的なニーズに関心を払うものであり、他のキリスト教の宗派、あるいは仏教、ヒンドゥー教、イスラームといった宗教よりも彼らの実際の要請によりよく応対してくれるものであると考えられている。実際、きわめて多くのペンテコステ派の人々は神癒を経験しており、この運動の急激な拡大をもたらしたもっとも重要な要因であると考えられている。また、神癒には、失業、アルコール依存症、家庭内のもめごとに対する癒し、あるいはマイノリティに向けられる人種的憎悪や社会的不正から生まれる苦しみに対する癒しなども含まれるとされる。

宗教的な癒しは、仏教、シャーマニズム、ヒンドゥー教、道教、儒教などでも行われるが、キリスト教の神の方がより効力のある治癒力を持っているとかなりの数の人々は評価しており、それが人々がペンテコスタリズムへと向かう理由の一つであると多くの研究者が指摘している。実際、ペンテコスタリズムがもっとも急速に発展しているアジア、アフリカ、ラテンアメリカにおいて、第1世代のキリスト教徒の8割から9割が改宗の理由を自分か家族が神癒を経験したからだとしている⁴⁴⁾。インドのペンテコスタリズムを調査したボーマンは、ペンテコステ派をカトリックや他のプロテスタントと区別するのは、奇跡的な治癒をもたらす神の力への信仰であるとしている⁴⁵⁾。

前述したようにペンテコステ派の宣教師や伝道師たちは「業としるし」を布教活動に不可欠なものと考えた。実際、神癒はペンテコスタリズムへと人々を引きつける際の大きな誘因となった。世界各地の諸文化においては病気を治したり、悪霊から人々を守ったりするとされる宗教的霊能者の影響力は強かった。人々はペンテコステ派の人々が説くキリスト教にそうした能力を求めた。神癒の機会が無料で与えられることも人々を引きつける一因となった。今日においては、神癒への信仰やその実践は通信などに関わる新しいテクノロジーを使って行われることもあり、この運動の影響力拡大の一因となっている⁴⁶⁾。

神癒はペンテコステ運動においてはさまざまな形で行われている。クルセ

ペンテコスタリズム（川島）

ードと呼ばれる大規模な集会で多くの人々を集め、神癒の奇跡を共有するという形態もあれば、より小さな信者の集まりのなかで祈りや断食を行いながら病人を癒すという形のものもある⁴⁷⁾。私の主な調査地であるスリランカでは、癒しの礼拝（healing worship）という場でも神癒が行われる。この礼拝は、日曜礼拝とは別の日の夕方に行われることが多かった。形式は日曜礼拝とよく似たもので、多くの場合ギター、キーボード、ドラムスなどを使った演奏に合わせて歌が歌われ、その後牧師などが説教し、最後に癒しを求める人々が前に出るというものである。その時、前述の「霊によって倒される」ことが起こることもあれば、按手して祈りを捧げるだけの場合もあった。また、牧師自身が病気などの問題を抱える家を訪問するという事例もあった。一度で解決できない場合は、問題が解決するまで訪問するとのことであった⁴⁸⁾。

使徒パウロの書簡のなかにも神癒の能力は記されており、中世においては特にカトリックの聖人や神秘家たちによって行われるものとされた。しかし、宗教改革によって生まれたプロテスタント教会のなかには神癒をカトリック的迷信であるとみなす傾向があった。18世紀から19世紀にかけてのヨーロッパにおける合理主義や近代医学の展開のなかでさらに否定的にみられるようになっていった。それでも、クエーカーや再洗礼派は神癒を信じていたし、メソヂスト教会の創設者であったジョン・ウェスレーは神癒の奇跡がたびたび起こったことを自らの日誌に記した。こうしたなかで、19世紀末にはホーリネス運動に属する人々を中心に神癒運動（divine healing movement）が起こった。ペンテコスタリズムはその直接的な継承者となったのである。ペンテコステ派の人々のほとんどは、聖霊に満たされることで誰でも神の力によって病人を癒すことが可能であると考えている⁴⁹⁾。

悪霊の追い出し（deliverance）と神癒とは密接につながっている。悪霊の追い出しもまた異言などと同様にキリスト教会の歴史においてペンテコスタリズムの登場以前にも行われており、20世紀初頭に新しく始まったというわけではない。しかしながら、この行為は今日においてもかなりの数のペン

テコステ派の教会において幅広く行われており、この運動の特徴の一つとも見られうることも確かである。この悪霊追い出しは新約聖書に記されている伝統の継承であると考えられている。教会によってはこの悪霊追い出しはきわめて重要な癒しの行為であるとされ、高度に専門化され、複雑な活動になっており、その行い方に関するセミナーなどが開かれることもあると言われる⁵⁰⁾。インドのパンジャブ地方の研究によれば、その地のあるペンテコステ派教会においても、神癒、特に悪霊の追い出しには大きな力点がおかれ、教会の発展の主因となっている。とりわけ多くのダリト（「不可触民」）の人々には「魔術」の影響が強く、彼らの間にキリスト教が広まる一因になっていると言われる。こうして癒されたものの1割が洗礼を受けると報告されている⁵¹⁾。

今日においてはほとんどのペンテコステ派の信者たちは近代医学を拒否することはないとされる。しかし彼らは医学による治癒が困難なときでも神癒は有効であると信じている。いかに医学が進歩しようとも、近代医学が十分には対処できない病気もある。また病気以外にも人々の生活にはさまざまな対処困難な苦しみが付随する。その結果、近代医学が進んだ地域においても神癒の要請が絶えないのである⁵²⁾。

4 非ヨーロッパでの受容

前述したように、ペンテコスタリズムは20世紀初頭に世界のいくつかの地域で同時発生的に生まれ、急速に世界の多くの地域に拡大した。それはもちろん一つには熱心な伝道活動によるものであるが、もう一つは明らかにペンテコスタリズムが非ヨーロッパの多くの人々にとってきわめて受け入れやすかったからでもある。結論から言えば、人々は自らの世界観を大きく変えることなく、キリスト教の神を受け入れることができた。ペンテコスタリズムはどのように伝道され、受容されたのか。そしてそれは過去の伝道、カトリックや他のプロテスタントの伝道とはどのように異なっていたのであろう

か。

前述のように、ペンテコスタリズムの多くの部分はその端緒においてはアズサ通りでのリバイバルの影響を受けた宣教師たちによって各地に伝えられた。欧米の宣教師がアジアやアフリカにキリスト教を伝えるという形態においては従来のカトリックやプロテスタントの宣教師たちと同じである。さらに、ペンテコスタリズムを伝えた宣教師たちがキリスト教の根源的な優位性を確信していたという点でも大きく違わない。彼ら以前の宣教師たちと同様に、「異教徒」の国々に「光」をもたらす者として彼らは自らをみていた。彼らにとってたとえばインドの聖人は「悪魔に取り憑かれた人々」であり、中国は「悪魔の巢窟」であった。イスラームに対しては偶像崇拜的なものとして批判することはなかったが、反キリスト教的な敵であるとみなした。ペンテコステ派の宣教師たちは、彼ら以前の宣教師たちと同様に信者たちには他の宗教からの根源的な断絶を望んだ⁵³⁾。

さらに初期の宣教師たちは、パターンリズムや人種主義的な態度をもそれ以前の宣教師たちから引き継いでいた。彼らの多くは外国人による監督がなければ、現地の教役者たちは効果的に動けないだろうと考えていた（しかし現実はその逆であり、宣教師たちの監督がないほど布教は効果的になされたとされる）。また、多くの宣教師たちは人種主義的であり、アフリカやインドなどで教会関係の成人を boy と呼ぶことは一般的であった。さらに、宣教師たちは現地の教役者たちとは隔離された場所に住むことを好んだ。植民地化のプロセスに対しても他の宣教師たちと同様に彼らは肯定的であった。植民地化は福音を広めるために神から与えられたものであると信じていた⁵⁴⁾。そうした態度は現地の人々の間に反発をもたらし、明らかに宣教をより困難にした。

しかしながら、これはきわめて重要な点であると思われるが、啓蒙主義や自然科学への態度や現地の人々の世界観への共感という点においては、ペンテコステ派の宣教師たちはそれ以前の宣教師たちとは根源的に異なっていた。ペンテコステ派以前の大部分のプロテスタントの宣教師たちにとって

は、アジアやアフリカの人々の文化や信仰は無知から来る迷信であり、西洋式の教育によって克服すべきものであった。そして病気は近代西洋医学によって治癒されるべきものであった。カトリックやプロテスタントの宣教師たちは実際、西洋教育を施す学校をつくり、病院をつくった。

しかしペンテコステ派の宣教師たちはこの点においてそれ以前の宣教師たちと大きく異なっていた。彼らにとっては、人々が直面する悪はたんなる迷信ではなかった。現地の人々は、病気、貧困、失業、孤独、悪霊、魔術、呪術などの問題を抱えていた。ペンテコステ派の宣教師たちは、人々のかかえる問題を無知な迷信として切り捨てることはせず、キリスト教の全能の神と聖霊によって解決されるものだと伝えた。そしてその解決法は多くの人々にとってより効果的なものであると認識された。宣教師たちは人々がかかえる問題は現実のものであると考えていたし、教育や合理的思考によって解決できるものではないと考えていた。現地の人々の苦しみは超越的、霊的な存在によってしか根本的には解決できないと彼らは考えたのである。その点において現地の人々とペンテコステ派の宣教師たちとの見解は一致したのである⁵⁵⁾。

このように、霊と邪悪な力の対立を基礎とするペンテコステ派の宣教師の世界観とアジアやアフリカの多くの地域の人々の世界観は大きく合致するものであった。そのためペンテコスタリズムの聖霊に関するメッセージは人々にスムーズに受け入れられたのだと考えられている。人々は「悪魔を翻訳することによってこの信仰を受け入れたのだとも言われる。ペンテコスタリズムは、霊的な力に重きを置く人々の世界観を否定することなく、その中に入り込み、人々の世界観に変更を加えたのである⁵⁶⁾。

こうして聖霊のバプティスマを受け、ペンテコスタリズムを受け入れた人々は、その後は熱心な伝道者となった。ペンテコスタリズムはその誕生直後から活発な伝道運動でもあったが、その中心にあるのは前述したように聖霊によるエンパワーメントである。彼らの多くは聖霊の導きによって目的地を決め、教会を設立した⁵⁷⁾。

おわりに

ペンテコスタリズムは今日ほぼ世界中で影響力を拡大しているキリスト教内でのグローバルな運動であるが、私が主にフィールドとしてきたスリランカもその例外ではない。メインラインのプロテスタント教会の信者数が低迷する中で、ペンテコスタリズムを受け入れた教会の影響力は確実に拡大してきた。その結果、それは仏教ナショナリズムからの激しい抵抗を招いてきた。私は、スリランカにおける反キリスト教的動きの政治的、経済的背景を探る中でペンテコスタリズムに出会った。

本稿は、ペンテコスタリズムの基本的な性格と歴史的展開のあり方に関して、近年欧米等で急速に蓄積されつつある研究に私のスリランカでの調査を付け加えつつ整理したものである。異言、預言、神癒、あるいは「霊によって倒される」、悪霊追い出しといった近代合理主義では説明困難であるとも思われるような現象を伴うこの運動のあり方に関して、できる限り客観的に明らかにしたつもりである。もちろんそれは一つにはこの運動の社会的、経済的、あるいは政治的影響を探る上で不可欠な作業であると考えたからである。しかしそれは、私自身がフィールドワークにおいて幾度となく遭遇してきたある意味きわめて超自然的な現象を自らに説明するための作業でもあった。

ピーター・バーガーは「現代の諸事情の分析において宗教を軽視する人々には大きな危険を覚悟することになる」と述べた⁵⁸⁾。宗教は近代化とともに少なくとも完全には衰退するものでもなく、あるいは全面的に私事化するものでもない。一見非合理に思われるものであっても、非常に多くの人々にとってはきわめて重要な意味をもつ。たとえ人々の根底に何らかの非宗教的な、たとえば政治的、経済的な動機があったとしても、現実に関する宗教的理解によって行動が決定され、正当化されることは多い。それゆえ、ジャーゲンスマイヤーとシェイクが指摘するように、「宗教的な語彙、信仰、概念

を真摯に受け止めること」は今日の社会科学において求められるきわめて重要な方向性の一つである⁵⁹⁾。

本稿で明らかにしたように、ペンテコスタリズムの急速な拡大の原因の一つは明らかにその宗教的信仰や実践の「非合理性」である。ペンテコスタリズムが今後どのように展開していくのか、あるいは現実の社会において人々の生活にどのような影響を与えていくのかに関してはさらなる多面的な考察が必要であると思われる。

注

- 1) Monica Duffy Toft, 'Religion and Political Violence', in Michael Jerryson, Mark Juergensmeyer, and Margo Kitts (eds.), *The Oxford Handbook of Religion and Violence* (Oxford, Oxford University Press, 2013), pp. 332-333.
- 2) 伊藤雅之「21 世紀西ヨーロッパでの世俗化と再聖化——イギリスのスピリチュアリティ論争の現在」『現代宗教 2015』国際宗教研究所、253-254 頁; Peter L. Berger, 'The Desecularization of the World: A Global Overview', in Peter L. Berger (ed.), *The Desecularization of the World: Resurgent Religion and World Politics* (Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1999), pp. 2-3; ホセ・カサノヴァ『近代世界の公共宗教』津城寛文訳、玉川大学出版部、1997 年、13 頁。
- 3) 藤原聖子「宗教は衰退したのか、していないのか」藤原聖子編『世俗化後のグローバル宗教事情〈世界編 I〉』岩波書店、2018 年、13 頁; Monica Duffy Toft, Daniel Philpott, Timothy Samuel Shah, *God's Century: Resurgent Religion and Global Politics* (New York: W. W. Norton, 2011).
- 4) Todd M. Johnson, 'Global Pentecostal Demographics', in Donald E. Miller, Kimon H. Sargeant, Richard Flory (eds.), *Spirit and Power: The Growth and Global Impact of Pentecostalism* (New York: Oxford University Press, 2013), pp. 319-320.
- 5) Allan Anderson, *An Introduction to Pentecostalism: Global Charismatic Christianity* (Cambridge: Cambridge University Press, 2004), pp. 281-2. 韓国のペンテコスタリズムについては、Andrew Eungi Kim, 'Pentecostalism in Korea: Shamanism and the Reshaping of Korean Christianity', *Bulletin of the Nanzan Institute for Religion and Culture*, 2013, <https://nirc.nanzan-u.ac.jp/en/files/2013/04/PS-1-Kim.pdf>.
- 6) Johnson, 'Global Pentecostal Demographics', p. 320.
- 7) 杉井純一「カリスマ運動の世俗性——シンガポール・シティハーベスト教会の事例」『駒沢大学文化』29、2011 年、106-85 頁。
- 8) Chad M. Bauman, *Pentecostals, Proselytization, and Anti-Christian Violence in Contemporary India* (Oxford: Oxford University Press, 2015); Michael Bergunder, *The South Indian Pentecostal Movement in the Twentieth Century* (Grand

- Rapids, Michigan: William B. Eerdmans. 2008); 川島耕司「ペンテコスタリズムとスリランカ社会——その自生的展開について」杉本良男編『キリスト教文明とナショナリズム——人類学的比較研究』風響社、2014年、185-213頁; Koji Kawashima, 'Pentecostalism, Open Economic Policy and Sinhala Buddhist Nationalism in Sri Lanka', *PentecoStudies: An Interdisciplinary Journal for Research on the Pentecostal and Charismatic Movements*, 16, 2 (2017), pp. 202-215.
- 9) Harvey Cox, *Fire from Heaven: The Rise of Pentecostal Spirituality and the Reshaping of Religion in the Twenty-First Century* (Cambridge, MA, Da Capo Press. 2001), p. 187. カリスマ派、あるいはカリスマ運動とは、既存の教会において聖霊による刷新を求めるペンテコステ派的な動きである。1960年代頃から伝統的なプロテスタントやカトリックの教会内において予期せぬ形で同時発生的に生まれたものである。Stanley M. Burgess (ed.), *The New International Dictionary of Pentecostal and Charismatic Movements, Revised and Expanded Edition* (Grand Rapids: Michigan, 2001), p. xix.
 - 10) 『海外伝道』日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団、2019年2月。
 - 11) Paul Schmidgall, *European Pentecostalism: Its Origins, Development, and Future* (Cleveland, Tennessee: CPT Press, 2013), p. 274.
 - 12) Claudia Währisch-Oblau, 'Material Salvation: Healing, Deliverance, and "Breakthrough" in African Migrant Churches in Germany', in Candy Gunther Brown (ed.), *Global Pentecostal and Charismatic Healing* (Oxford: Oxford University Press, 2011), p. 63.
 - 13) Dena Freeman (ed.), *Pentecostalism and Development: Churches, NGOs and Social Change in Africa* (New York, NY: Palgrave Macmillan, 2012); Anderson, *An Introduction to Pentecostalism*, pp. 261-267; Donald E. Miller and Tetsunao Yamamori, *Global Pentecostalism: The New Face of Christian Social Engagement* (Berkeley: University of California Press, 2007), pp. 177-183; David H. Lumsdaine (ed.), *Evangelical Christianity and Democracy in Asia* (Oxford: Oxford University Press, 2009).
 - 14) Allan Anderson, 'The Emergence of a Multidimensional Global Missionary Movement: Trends, Patterns, and Expressions', in Miller, et al. (eds.), *Spirit and Power*, p. 30.
 - 15) Michael Bergunder, 'The Cultural Turn', in A. Anderson, M. Bergunder, A. Droogers & C. van der Laan (eds.), *Studying Global Pentecostalism: Theories and Methods* (Berkeley: University of California Press, 2010), p. 57.
 - 16) Anderson, 'The Emergence of a Multidimensional Global Missionary Movement', in Miller et al. (eds.), *Spirit and Power*, pp. 31-33; Bergunder, *The South Indian Pentecostal Movement*, p. 23; Stanley M. Burgess (ed.), *The New International Dictionary of Pentecostal and Charismatic Movements, Revised and Expanded Edition* (Grand Rapids: Michigan, 2001), pp. 118-120.
 - 17) Anderson, 'The Emergence of a Multidimensional Global Missionary Movement', pp. 31-32.

- 18) Burgess (ed.), *The New International Dictionary*, pp. 239-240.
- 19) Schmidgall, *European Pentecostalism*, p. 60.
- 20) Allan Anderson, *Spreading Fires: The Missionary Nature of Early Pentecostalism* (London: SCM Press, 2007), pp. 48-49.
- 21) Ann Taves, *Fits, Trances, and Visions: Exploring Religion and Explaining Experience from Wesley to James* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1999), pp. 330-336.
- 22) Charles H. Mason, 'Tennessee Evangelist Witnesses', *Apostolic Faith*, April 1907 (<http://www.azusabooks.org/af/LA06.pdf>); Taves, *Fits, Trances, and Visions*, p. 335;
- 23) Anderson, *Spreading Fires*, p. 48.
- 24) Cecil Robeck Jr., 'Launching a Global Movement: The Role of Azusa Street in Launching Pentecostalism's Growth and Expansion', in Miller et al. (eds.), *Spirit and Power*, pp. 42, 50.
- 25) Robeck Jr., 'Launching a Global Movement', p. 50.
- 26) Anderson, 'The Emergence of a Multidimensional Global Missionary Movement', p. 33.
- 27) Anderson, 'The Emergence of a Multidimensional Global Missionary Movement', p. 27.
- 28) John C. Green, 'Pentecostal Growth and Impact in Latin America, Africa, and Asia: Findings from a Ten-Country Survey', in Miller et al. (eds.), *Spirit and Power*, pp. 335, 339.
- 29) Burgess (ed.), *The New International Dictionary*, pp. 354-358.
- 30) 'Brother Max Wood Moorhead's Letter', *The Bridegroom's Messenger*, 139, 1 September 1913, p. 4.
- 31) 本稿における聖書の引用は、共同訳聖書実行委員会『聖書 新共同訳』日本聖書教会 (1988 年) に依っている。
- 32) Burgess (ed.), *The New International Dictionary*, p. 360.
- 33) Bauman, *Pentecostals*, p. 33.
- 34) Anderson, *An Introduction to Pentecostalism*, p. 23.
- 35) Burgess (ed.), *The New International Dictionary*, pp. 671, 674; Anderson, *Spreading Fires*, p. 19.
- 36) Henri Gooren, 'Conversion Narratives', in Anderson et al. (eds.), *Studying Global Pentecostalism*, p. 100.
- 37) Heather Kavan, 'Glossolalia and Altered States of Consciousness in Two New Zealand Religious Movements', *Journal of Contemporary Religion*, 19 (2004), pp. 171-181; Bauman, *Pentecostals*, pp. 30-31.
- 38) Felicitas D. Goodman, *Speaking in Tongues: a Cross-cultural Study of Glossolalia* (Chicago: University of Chicago Press, 1972), pp. xxi, 59, 60.
- 39) Kavan, 'Glossolalia and Altered States of Consciousness', pp. 171-181.
- 40) Donald E. Miller, 'Introduction: Pentecostalism as a Global Phenomenon', in Miller et al. (eds.), *Spirit and Power*, pp. 11-12.

- 41) Burgess (ed.), *The New International Dictionary*, pp. 1072-74.
- 42) Taves, *Fits, Trances, and Visions*, p. 241.
- 43) Burgess (ed.), *The New International Dictionary*, p. 1074.
- 44) Candy Gunther Brown, 'Introduction: Pentecostalism and the Globalization of Illness and Healing', in Candy Gunther Brown (ed.), *Global Pentecostal and Charismatic Healing*, pp. 3, 14, 18-19; Cox, *Fire from Heaven*, p. 254.
- 45) Bauman, *Pentecostals*, pp. 32-33.
- 46) Brown, 'Introduction: Pentecostalism and the Globalization of Illness and Healing', pp. 18-19.
- 47) Brown, 'Introduction: Pentecostalism and the Globalization of Illness and Healing', p. 15.
- 48) インタビュー、コロンボ、2016年3月。
- 49) Anderson, *Spreading Fires*, p. 35; Taves, *Fits, Trances, and Visions*, p. 227; Brown, 'Introduction: Pentecostalism and the Globalization of Illness and Healing', p. 10.
- 50) Keith Clifton Brooks, "'Deliver us from Evil": A Critical Analysis of Soteriological Discourse in African Pentecostalism', M. A. thesis, University of the Western Cape, 2015, p. 26.
- 51) John C. B. Webster, 'Margins of Faith: Dalit and Tribal Christianity in India', in Rowena Robinson and Joseph Marianus Kujur (eds.), *Margins of Faith: Dalit and Tribal Christianity in India* (New Delhi: Sage Publications, 2010), p. 106.
- 52) Brown, 'Introduction: Pentecostalism and the Globalization of Illness and Healing', p. 8.
- 53) Anderson, *Spreading Fires*, pp. 233-237.
- 54) Anderson, *Spreading Fires*, pp. 249-254.
- 55) Anderson, *Spreading Fires*, pp. 239-240.
- 56) Anderson, *Spreading Fires*, pp. 238-241.
- 57) Anderson, *Spreading Fires*, p. 67.
- 58) Berger, 'The Desecularization of the World: A Global Overview', p. 18.
- 59) Mark Juergensmeyer and Mona Kanwal Sheikh, 'Sociotheological Approach to Understanding Religious Violence', in Jerryson, et al. (eds.), *The Oxford Handbook of Religion and Violence*, p. 621.